

# 食べることを大切にし 患者に寄りそう

北病院 摂食嚥下障害認定看護師永井浩美さんに聞く

先日行われた健康づくり交流会での永井看護師の報告は大変感動的でした。参加できなかった方のために、もう一度永井看護師にお聞きしました。

## 「食べる」にかかわる専門職を結集

— お疲れ様でした。大変反響も大きかったと思います。報告を行うにいたった経過はどんなことでしたか。

もともと北生協歯科では「食べる」とについてとりくみが行われていましたが、北病院に常勤の言語聴覚士さんが入られ、私が認定看護師

## 食べることで回復につながる

— 肺炎の患者さんに禁食の指示が医師から出されるケースが多く、「食べることを大事にしたいなら医者を探さないといけない」という話が交流会の午前中になりました。

そうですね。北病院でも肺炎などの病気で熱があったりして、食事を食べられない

## 食べられない患者さんとも寄りそう

— 永井さんの報告はそうした事例とは少し視点が違っていましたか？

食べることで見違えるように元気になる方は多く見えますし、私たちも励みになっていることの一つです。食べるということは簡単なようですが、本当はとて複雑な体の仕組みで行われています。患者さんは今まで出来ていたことができなくなり、頑張っても上手く行かない場合もあります。今回お話しした事例は回復を目指す事例とは違いますが、懐かしい味に涙されたり、看取られる家族と想いを共有できたことは忘れ

ができません(事例1・2参照)。

— 永井さんから紹介のあった事例報告に会場では目頭をおさえていた方も見えましたが、自分も最期の時は北病院にお世話になりたいという声も多く出されていました。本当に貴重なお話をありがとうございました。

状態の患者さんは禁食になる事があります。医者や看護スタッフが連携しあって飲み込みの状態をみながら出来るだけ早く食事を提供しています。やはり口から食べる事ができる患者さんは回復も早く、褥瘡などの回復も早いので、大切だと思っています。



### 事例1 あんなに甘党だったのに

認知症の終末期の患者さんで、もともと甘い食べ物がお好きの方でした。飲み込む力が低下して訓練でゼリーを食べていましたが、飲み込みができず、吸引を行っていました。しかし、吸引は苦痛を伴う処置でゼリーをすすめても両手で口を押えて食べ物を拒否する姿を見せるようになりました。苦痛を伴わず、味わう援助は出来ないかと考え、綿棒に蜂蜜をつけて口の中に甘い味覚が分かる部分をマッサージしました。すると笑顔になられ、その様子を見た家族の方も「良かったね」と喜んでみえました。

### 事例2 晩酌の楽しみをもう一度

終末期の患者さんで毎晩晩酌をするのが日課でした。病状から眼も開けられず、口も開いたままの状態でした。家族から、「最期に大好きなお酒を飲ませてあげたい」との希望があり、綿棒に日頃晩酌していたお酒やビールを浸して匂いをかいでもらったり、口をマッサージして味わってもらいました。またその方法を家族にも説明して行ってもらいました。すると開けられない目から涙を流されました。その様子を見て家族も一緒に涙されました。

